

2018年8月5日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「わたしを見たもう神」

聖書：創世記16:1～16

サライは、子どもが出来ずに年を重ねていた。女性は子を産まなければ軽んじられると言う社会の中で苦しみ悶えていた。そこで取った行動は、この社会構図に合わせた生き方で行動を起こす。自分の女奴隷であるハガルを、夫アブラムに与え、そのことにより自分の子を得ようとする。しかしこの考えは、自分よがりの考えで、この世の構図に流された生き方であった。ハガルは、サライの思い通りに子を宿すが、サライの思いは満たされず、自分が与えたはずのハガルに嫌がらせをし、この場に居られない状況を作った。ハガルは身重でありながらも、荒野へ飛び出してしまふ。行く当てもなく荒野をさまようハガルの思いは、居場所のない辛さ、悲しみでいっぱいであったことであろう。人間の社会は、過った構図の中で身を任す時、そこには人間の弱さと醜さがあらわにされて行くものである。この女性たちの争いのきっかけは、結局は、男性社会が生んだ結果と言えよう。

しかし、そんなハガルに神は出会ってくださる。ハガルは一つの苦難を通して神との出会いに預かる。神は人間が起こす苦難の中にも私たちに会ってくださるのである。

内村鑑三は言う。「産を失うも可なり、願わくは神の聖顔を失わざらんことを。病に悩むも可なり、願わくは神に棄てられざらんことを。死するも可なり、願わくは神より離れざらんことを。神はわがすべてなり。神を失うてわれはわがすべてを失うなり。われらに父を示したまえ。さらばたれり。わが全生涯の目的は、神を見、彼をわがものとなすにあり、その他にあらず。」これは内村鑑三の経験からの信仰である。

時に苦難は、神に出会う事もあれば、神を見失う事もある。しかし覚えておきたい事は、私たちがどのような状況に立たされても、神は「エル・ロイ、わたしを顧みられる神(わたしを見たもう神)」であることを、苦難の中からも見出していくものでありたい。(神谷)